

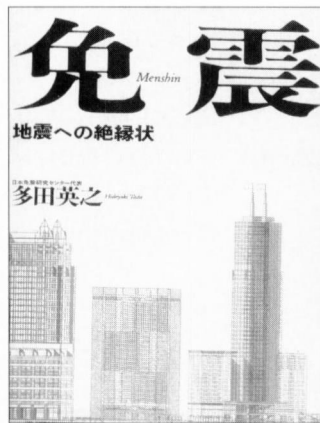
**アメリカはなぜダム開発をやめたのか**  
公共事業チェック機構を実現する議員の会=編

46判・203ページ。定価1 545円（税込）。平成8月9月17日初版発行。同年9月19日受付  
〒104 東京都中央区築地2-10-12 築地書館発行。  
Tel 03-3542-3731

**最**近、日本にまだダムは必要なのか、なぜアメリカはダム開発をやめたのか、が話題になることが多い。本書は党派を超えた国会議員が中心になり、米国のダム建設を推進、管理してきた内務省開拓局、陸軍工兵隊、TVAを訪問し、意見交換やダム現場視察を通してわが国の公共事業のあり方への政策提言をとりまとめている。公共事業という名の下に、時代の変化を映すことなく進められがちな各種公共プロジェクトに対し、地域の歴史・文化、住民移転、希少生物の保護、環境への影響、そして事業の費用-便益の分析評価など、これらをチェックするための情報開示システムや仕組みが、わが国にないことを指摘している。

公共事業とは何か、税金の無駄づかいはないのか、を問いかけ、米国の河川政策転換の背景や公共事業への市民活動組織NGOの関わりと取り組み事例などを交えながら、近年の米国における政策形成のプロセスを紹介し、日本における行財政改革と公共事業チェック機構実現の必要性について問うている。

今日、行財政改革が最重要政策課題として国民的な議論が進む中で、米国での新たな河川管理の潮流を学び、日本の河川方公布百年という節目に、今後のあり方を考える時宜を得た本といえよう。この機会に、くらしと税で賄われる公共事業について、それぞれの立場で一度省みてはどうだろうか。【く】



**免震 - 地震への絶縁状**  
多田英之=著

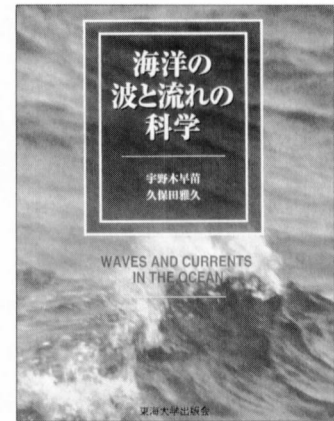
46判・199ページ。定価1 500円（税込）。平成8月9月20日初版発行。同年9月5日受付  
〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館発行。  
Tel 03-3230-5211

**阪**神・淡路大震災の教訓から、われわれ土木技術者はより地震に強い公共施設の建設を社会から求められている。橋梁の分野では反力分散、免震という言葉がにわかに市民権をもち始めたが、ほんの少し前までは特異な構造と見られていたことを考えると複雑な思いがする。著者はわが国の免震建築のパイオニアの一人である。本書の基軸となるのは免震設計の基本思想であり、従来の耐震設計と対比しながら話が進んでいく。

前半では兵庫県南部地震を無傷で耐え抜いた免震建築の例や、日本の地震用に開発した積層ゴムと鉛ダンパーを用いた免震装置を解説しており、実用化の過程での苦労が生々しく伝わってくるが、読み進むにつれ、本書が単なる技術紹介書でないことに気が付く。

後半では免震建築の着工までに遭遇した、許認可システムやその周囲を取り巻く官・学の弊害など、新技術を受け入れにくい体質を歯に衣着せぬ物言いで批判している。突き詰めれば、6 000人以上もの尊い犠牲がなければ物事が変わらないという、わが国の根底に潜む不合理さに対する怒りのようにも感じられる。

やや感情的過ぎる論調も多く、読み手によって評価の分かれる本かもしれないが、免震に関する技術者としての姿勢には、どこか本田宗一郎のような一徹ささえ感じられる。技術と科学のあり方について考えさせられる本である。【た】



**海洋の波と流れの科学**  
宇野木早苗・久保田雅久=著

A5判・356ページ。定価3 914円（税込）。平成8月9月10日初版発行。同年9月11日受付  
〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 東海大学出版会発行。  
Tel 03-5478-0891

**黒**潮や親潮などの海流の動きは、どのようなシステムで引き起こされているか？ 皆さんはそのことについて考えられたことがあるのだろうか。

黒潮や親潮の流れている場所や方向は社会の授業で習うだろうが、どうして海流が起きるかは考えられたこともない方が大半であろう。

本書は、このような海流の動きや潮の満ち干、津波や高潮など、海洋の流れや波について、大学の教養物理程度を理解されている方にわかりやすく書かれた入門書である。

海は地球表面積の約70%を占めており、今仮に陸地を削って海に埋め、地表面を平にならすと、地球は深さ2 400mの海に覆われた水球になる。まさに、地球は海洋惑星である、といっても過言ではない。そして本書を読むと、海洋の動きには地球の動き-自転-が密に関係していることがわかる。

ここで問題を1問。海に風が吹いたとき、海水はどの方向に動こうとするか？ 風の吹く方向と同方向と思えるが答えは違う。北半球では風の吹く方向に向かって右向きが正解である。この解答について興味をもたれた方は、本書を読まれることをまずお勧めしたい。

そうでない方も本書を通して、地球環境にかかわる大きな要因の一つとなっている海洋の動きに、土木技術者の目で触れてみられてはどうだろうか。【た】